



いじめによる自殺が後を絶たず、心が痛みます。死を選ぶに当たっては相当の心の葛藤があったはずで、不登校児童生徒の増加も深刻な問題です。思春期を迎えた子どもたちは自立と不安の中で心が揺れています。心のサインを見逃すと大きな問題に発展したりします。そうならないために私たちは日ごろからどんなことに気を付けただよいのでしょうか。

心療内科医の明橋大二先生は著書の中で、「人間が生きていく上で一番大切なものは『存在への安心』だ」と述べています。今の子どもたちが抱えている様々な問題は自己評価の低さから生じているといえます。その自己評価には二段階あり、第一段階は「存在に対する安心」つまり「自分はありのまま存在価値がある必要な人間なのだ」という感覚で、これは親が自分の存在を喜んでくれるということから育まれるものであるといえます。自己評価の第二段階は「能力に対する自信」で、勉強やスポーツができるなど自分の能力に對する自信です。これは周囲の人から

ほめられることによって育まれます。しかし、よく「ほめて育てる」といいますが、それが効果があるのはあくまで第一段階の自己評価が十分育まれている子であって、それが欠けている子には逆効果になるとのことです。なぜかという「存在への安心」がある子どもは、自分に能力があってもなくてもお父さんお母さんにとっては大切な存在だという安心感があり、その上でほめられると頑張るし、たとえ期待に届えられなくても満足するのです。しかし「存在への安心」が欠けている子どもは、ほめられることに自分の存在価値を求め、常にほめられようとことん頑張ります。やがて息切れがして、頑張れなくなり、深刻な事態に陥ることがあります。従って、大切なことは「存在への安心」を十分満たした上で、自信を育ててやることだそうです。

子どもたちは学校で様々な体験をします。特に嫌なことがあった時はお父さんお母さんに話を聞いてほしいと思っています。母親が留守がちであったり、忙しさのあまり話を傾けてくれなかったりすると、モヤモヤがたまり、心が不安定になります。親が一緒に話を聞いてやるのが大切です。子どもはストレスを言葉で表現することができません。つらいことも我慢したり耐えたりします。このストレスが限度を超えると行動になって出てきたり、心身症状の症状となって表れたりします。こういう症状が出たときは、

心の中に何かあると考え、その背景にある子どもの気持ちを理解してやることです。明橋先生は「十歳までは徹底的に甘えさせるべき」と言っています。子どもを全面的に受け入れてやることです。そうすることで子どもの心が安定し、安心感を持ち、意欲が出て、よい子に育つとのこと。

思春期の子どもたちの心は、自立したり依存したり、揺れ動いています。この時期の接し方として大切なことは、子どもたちの心の揺れを認めてやり受け入れてやることで「存在への安心」を高めてやることのようにです。指示、命令をすることでなく、見放すのもなく「子どもが不安になって後ろを振り返ったとき、そこにちゃんと親がいて、大丈夫だよとうなずいてくれる」という関係が大切なようです。



「児童手当」を受給されている皆さんへ

現在、児童手当を受給されている方は「児童手当現況届」を提出することが法律で義務付けられています。

これは、受給者の前年の所得状況と6月1日現在の養育状況などを確認審査するための大切な届けです。

該当者には、6月上旬に用紙を送付しますので、必要事項を記入のうえ提出してください。

提出されない場合は、6月以降の児童手当の支払いが受けられませんので、必ず提出してください。

提出期限 6月29日(金)

持参品 届け出の際には、次の物をお持ちください。

- 現況届用紙
- 印鑑
- 年金加入証明書または健康保険証の写し(厚生年金加入者)

受給中に次のようなことがあった場合には、手続きをしてください。

- 住所が変わったとき
- 死亡または資格を失ったとき
- 出生などにより、支給要件児童数が変わったとき
- 公務員になったとき

問合せ 市民生活課 国民年金担当